「森銑三刈谷の会」だより　No. 28

発行　2024/2/17（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

蘭学を広めた大功労者大槻磐水
オランダ流の外科医の子・・・建部清庵の塾僕・・・
清庵と玄白・・・玄白から蘭化へ・・・『蘭学階梯』と『重訂解体新書』・・・太陽暦の正月
（森銑三『おらんだ正月――日本の科学者達』1938, 冨山房百科文庫　目次より）

第28回：2024/1/20（土）「森銑三『おらんだ正月』―「おらんだ正月」って何？」参加11人　神谷 磨利子

森銑三『おらんだ正月』（1938年、冨山房百科文庫）が刊行される前に母にそれを伝えた時、母は「いい名前がついたね」と喜んだという。青雲書院版(1948)の「後記」にそのことを書いている。その母は新しい本ができると喜んで「お前の本の本文は読まないけれど、序文だけは読むよ」と言った。「序文を読めば、これはどんなことを書いた本かということだけは見当が附く。さうしたことを、母は独りでに会得したらしかつた」と銑三は記す（「思ひ出すことども」『著作集』続編15巻p.86）。銑三は書物の「序跋」について「序跋の類は、あれば・・親しみの深いものにする。そしてそれらを先づ読んで、心持の上に一つの用意を得て本文を読みにかかる」（「書物」『森銑三著作集』続編9巻p.338）と言っている。『おらんだ正月』は好評により再版、改版を重ね、それぞれに丁寧な「序」「後記」が付いている。銑三の言に従い、今回は先ずその読み比べをした。供養塚時代（1926-28年、本会たより No.23, 25参照）に宮原晃一郎から「子供の科学」の原田三夫に紹介されて書いた、江戸時代の科学者たちの事蹟が『おらんだ正月』の元になったこと、そもそもは刈谷町立図書館の村上文庫の整理の時に江戸時代の科学書類を見て、その時代の科学者たちに敬慕の情を抱いていたこと等、この会にはなじみになった事柄が並んでいる。刈谷の亀城尋常小学校、高崎南小学校の代用教員時代に接した子どもたちに語りかけるように書いたという言葉も嬉しい。「銑三さんの文章は子ども向けとは言え上品でわかりやすい言葉使いだ」「『おらんだ正月』をもう一度読み返したくなった」など感想が寄せられた。

子どもたちへ届けたい銑三の想い　飯田芳子

当日の収集された資料からは匂い立つような香気が感じられました。江戸幕府という体制をものともせず新しい時代を築いてゆく過程を担った人々の心意気を子どもたちへ届けたいという、森銑三のただ一筋の想いを感じさせるものでした。お母さまがまた立派ですね。

鷹見泉石の日記では泉石29歳の時「オランダ正月」へ招かれています。鳥居耀蔵は目の上の瘤のように「蛮社の獄」で思想犯を断罪しましたが、江戸の市井の中で「新元会」と称しての集まりが存在していることには目を向けることはしなかったのかと不思議な感じがします。「芝蘭堂　新元会図」を私が知ったのは泉石の資料を探し求め始めたこの4，5年のことで、床の軸に一角魚の絵が描かれているのにびっくりしたものです。

興味深い「おらんんだ正月」　長嶌秀雄

いろいろ興味深い話が聞けて楽しい会でした。「副題を「日本の科学者達」としたが、「近世実学者叢傳」とした方が良かった。しかし、実学と言う言葉はいまは行われていない」（『近世日本の科学者達』（青雲書院、1948、はしがき）とあったが、福沢諭吉のいう実学とは違うのだろうか？

寛政異学の禁が出され、林子平の『海国兵談』が絶版となった時におらんだ正月を行う危険性は無かっただろうか？寛政十年（1798）に本居宣長が『古事記伝』を完成させている。

松本奎堂はどちらの人間だろうか？興味は尽きない。

「偉人暦」『新愛知』から『子供の科学』『おらんだ正月』へ　鈴木哲

『おらんだ正月』が版を重ねたことは読んでいたが、冨山房百科文庫(1938)- 青雲書院(1948)- 角川文庫(1953)- 平凡社(1963,『世界教養全集』17)- 冨山房百科文庫(1978)-岩波文庫(2003)と知られた。異版の序・後記を目にする機会は少なく興味深い。青雲書院(1948)「最も古いのは、実に二十二年前の旧稿に属する」は『子供の科学』(1926/9-1930/1)を指すという。資料によれば『おらんだ正月』52話のうち34人が『子供の科学』と、35 人が「偉人暦」『新愛知』(1924/1-25/10)と共通する。角倉了以、青木昆陽、杉田玄白、平賀源内、大槻磐水、高野長英ら26人は3点に見える。29歳時の「偉人暦」が『子供の科学』-『おらんだ正月』と成長し、書店に並んでいる。話数52はおらんだ暦52週を踏まえ、「芝蘭堂新元会図」（寛政六，1794）の「一千七百九十四年一月一日」は「一千七百九十五年―」（口絵掛け軸の右上、大槻清崇＝磐溪の画讃）が正しいと思われる。

予定

29:2024/2/17（土）神谷磨利子「森銑三と書誌学―「塙検校と名古屋の学者達」（『書誌』1926.12）を読む」
30:2024/3/16（土）鈴木哲「永井荷風が森銑三を『真の学者』と呼んだ日」

読んでお得な気分の新編『おらんだ正月』（岩波文庫版）　河橋育実

『おらんだ正月』には沢山の人が紹介されていますが、一人一人の内容が簡潔に読み易い文章になっているので、何回も出版社が変わって再版されたのも納得できます。

私が読んだのは当日の資料で最後に紹介されていた『おらんだ正月』（岩波文庫版、2003年1月）です。

改めて読むといろいろな事が分かるような気がします。この岩波文庫版には番外二篇があり、外山滋比古さんの解説もありお得な気分になりました。

外山さんの解説の最後の文章が好きです。

「森さんは、実におだやかで、心やさしく、若いものにあたたかかった。」

岩波文庫版『新編　おらんだ正月』（2003.1）

目次

新編の編集について

Ⅰ　新元会――おらんだ正月初聞・・・14
新元会――おらんだ正月初聞

Ⅱ　おらんだ正月
序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
一　牛に乗って外へ出た仙人のような医者永田徳本
（以下　五十二まで　略）
参考文献一覧
後　記

Ⅲ　番外二篇
一　わが国マッチ業の父と仰がるる清水誠・・376
二　古今独歩の碁の名人本因坊道策・・・・・385

解　説（外山滋比古）・・・・・・・・・・・・・・・393

Ⅰの「新元会――おらんだ正月初聞」は前回読み合わせた資料No.13の「おらんだ正月」である。

初出　雑誌『社会科教育』1963年2月号

『森銑三著作集』続編第2巻pp.501-506

Ⅲの「番外二篇」は雑誌『子供の科学』に発表された作品で『おらんだ正月』には掲載されなかったもの。

そのうち、一の「わが国マッチ業の父と仰がるる清水誠」は第26回「森銑三刈谷の会」（2023/11/18）の鈴木哲さん発表「森銑三と江戸風俗研究家・杉浦日向子」資料の中に記事が載っている。森銑三著『偉人暦　上・下』（中公文庫1996/12））の書評（毎日新聞1997/2/2）に次のように書かれていた。

> 奇人あり、貴人あり、名君武将あり、侠客あり、大学者あり、燐寸の創製者あり。

この「燐寸の創製者」が『子供の科学』（1927年2月号）に発表された「清水誠」である。

外山滋比古氏の解説や『ももんが　森銑三氏追悼特輯』（1986年4月号）の「同郷の縁」など、「森銑三と外山滋比古」については別の機会に改めて取り上げたい。　（神谷磨利子）